

2022. 4. 3 (日) ヨハネ13:1~11

13:1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。

13:2 夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。

13:3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。

13:4 イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

13:5 それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。

13:6 こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」

13:7 イエスは彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」

13:8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」

13:9 シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」

13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」

13:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。

#### <説教>

今は受難節の最中(さいちゅう)です。イエスの受難の中心はもちろん十字架の死です。

生まれながらに神に反逆している罪深い人間である私たちのために、イエスは〈私たちの罪をその身に負われ〉(I ペテロ 2:24)、神から〈のろわれた者とな〉(ガラテヤ 3:13)ってください、私たちの代わりに十字架上で神の怒りをその身に受けてくださいました。

罪深い私たちが自らの罪のゆえに神にのろわれ捨てられるという地獄のさばきを、私たちの代わりにイエスが受けてくださり、十字架の上で死んでくださいました。

そうするために父なる神は御子イエスを人としてこの地上にお遣わしになったのですから、そのようにしてイエスは天の父なる神に完全に従順な義なる生涯を送られたのです。

更にイエスは十字架の死で終わらず、墓に葬られてから三日目に死人の中からよみがえり、死にも打ち勝ってくださいました。

そしてよみがえりから40日目に天に昇られ、父なる神の右の座にお着きになりました。

それゆえ、このイエス・キリストを神の怒りとさばきからの救い主、永遠の地獄の滅びからの救い主と信じる者(私たち)は、イエスが十字架で流された血によって罪を洗いきよめられ、イエスの義をいただき、神の怒りとさばきを免れ、イエスにあるよみがえりの

いのち、永遠のいのちをいただいて救われるのです。

私たち人間は必ず一度は死ななければなりません、イエスを〈信じる者は死んでも生きるのです〉(ヨハネ 11:25)

私たちが救われるために信頼すべきお方はただイエス・キリストお一人であり、私たちが救われるのに必要なのはこのイエス・キリスト信じる信仰なのです。

私たちは誰でもイエス・キリストを自分の唯一人の救い主と信じて救われるのです。

そのことを受難節のこのときも覚えて、私たちに救い主を備え、与えてくださった神に対する感謝と喜びをもって、神と人を愛し、神と人に仕えて歩んでいきたいと願います。

なぜなら、父なる神が私たちに救い主として与えてくださった御子イエス・キリストが、どうしようもなく罪深い私たちをまず愛してくださり、十字架の受難を通してまず私たちに仕え、奉仕してくださったからです。

本日読まれた聖書にはそのことが記されているのです。

イエスが十字架で死なれる日の夜の「最後の晚餐(夕食)」の様子とそこでイエスが弟子たちにお語りになったことが、ヨハネの福音書 13～17 章には記されています。

そしてイエスが弟子たちの足を洗われた「洗足」の出来事がまず初めに記されています。

使徒ヨハネは、イエスが弟子たちを〈最後まで愛された〉(1)、しかもそこには〈イエスを裏切ろうという思いを〉持っていた〈イスカリオテのユダ〉がいた(2)にもかかわらず、その愛の現れとしてイエスが弟子たちの足を洗われ、弟子たちにお仕えになったことを聖霊によって思い起こして(cf.14:26)書き記したのです。

確かにイエスの弟子たちへの愛と弟子たちのためのイエスの「奉仕」の中心は十字架の死なのですが、それと同じ愛と奉仕をイエスの「洗足」にヨハネは見たのです。

〈この世を去って父のみもとに行く〉(1)とは、十字架の死、葬り、復活、昇天というイエスのみわざのことでしょう。

ご自分のみわざによって弟子たちの罪を贖い、悪魔のわざに打ち勝つことなどすべてが父なる神によってご自分に委ねられていることをイエスは確認なさいました(3)。

そのようなイエスがご自分の弟子たちになさったことは、家の主人のすることではなく、奴隷(それも奴隷の中でも一番格下の奴隷)がすることでした。(4～5節)

実はそのとき弟子たちは〈自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論〉をしていました。(ルカ 22:24)

そんな弟子たちにとっては、身を屈め、低くして、しもべの姿で弟子たちの埃(ほこり)まみれの汚い足を洗われるイエスの姿はあまりにも衝撃的でした。

そんな弟子たちの中で、やはりペテロがその衝撃を口に出してイエスに言いました(6)

〈主〉である〈あなたが〉〈私の〉〈足を洗ってくださるのですか〉、弟子の「私が」「あなたの」足を洗えと言われるのなら分かりますが…、とさっぱりイエスのなさっていることの意味がわからないペテロにイエスはお答えになりました(7)。

そのみことばにへりくだって素直に納得すればよいものを、ペテロは「決して(直訳:決して永遠に)私の足を洗わないでください。」と更に強硬にイエスに言いました(8)。

かつてイエスが弟子たちにご自分の受難を予告なさったときのペテロとイエスのやり取り(16章)を思い起こさせる光景です。

今度はイエスは「下がれ、サタン。」とまでは言われませんでした、それでも相当に

厳しい言葉でペテロにお答えになりました(8)。

つまり、まずイエスがペテロの足を洗うという「奉仕」をしてこそ、ペテロがまずイエスから足を洗っていただくという「奉仕」をしていただいてこそ、ペテロ(人間)にイエス(神)との(正しい、良い)関係が生まれるとイエスは言われたのです。

本当の問題は、実際の「洗足」そのものでなく、「洗足」が指し示していること、すなわち、人間の汚れた罪の洗いよめのことでした。

つまり、イエスが御父のみこころに従ってペテロのために十字架で御からだを裂き、血を流し、いのちをお捨てになる、そうやってイエスがペテロのためにまず奉仕して下さるという方法(神のお定めになった方法)でしかペテロの罪の洗いよめはない、ペテロとイエス(神)との正しい関係は成り立たないのだとイエスは言われたのです。

〈関係〉と訳されている言葉には「分け前、相続」(cf.ルカ 15:12)という意味もありますので、イエス・キリストを救い主と信じ、自分の汚れた足(すなわち罪や罪の「歩み」)を十字架のイエスの血によって洗いよめていただく者は罪の赦し、キリストにある復活のいのち、永遠のいのちを受け、神の国を相続することをイエスは言われたのです。

「あなたはわたしと関係ないことになります。」と言われたペテロは大慌てで答えます(9)が、そこでもまたイエスにたしなめられ(10 前半)、結局そのときはよく分からないまま足だけイエスに洗っていただいたのでしょう。

このように霊的に鈍く、目が曇らされている者を見捨てず、忍耐強くお教えになることもまたイエスがペテロにしてくださった奉仕であったとすることもできます。

私たちがペテロと全く同じように、イエス・キリストに〈最後まで愛され〉ており、イエスの十字架の血によって罪を洗いよめられた者です。

復活し昇天して父なる神の右にお着きになったイエスは日々罪を犯している私たちのために今日もご自身の十字架の功績をもって御父にとりなしをしてくださっています。

そのようにして私たちはイエス・キリストに仕えていただいて生かされているのです。